

令和5年度 第1回  
ICTを活用した歩行者移動支援の普及促進検討委員会 議事概要

**1. 開催日時等**

日 時：令和5年12月1日（金） 9：30～11：00  
場 所：3号館8階 特別会議室（Web参加併用）  
座 長：坂村 健 東洋大学情報連携学部 INIAD 学部長  
委 員：竹中 ナミ 社会福祉法人 プロップ・ステーション 理事長  
田中 淳 東京大学大学院情報学環 特任教授  
古屋 秀樹 東洋大学国際観光学部 教授  
森 亮二 弁護士、国立情報学研究所 客員教授

主 催 者：国土交通省 技監

行政側出席者：政策統括官、大臣官房、総合政策局、不動産・建設経済局、都市局、水管理・国土保全局、道路局、鉄道局、自動車局、港湾局、航空局、観光庁、国土技術政策総合研究所、国土地理院

オブザーバー：東京都都市整備局、東京都福祉保健局

事 務 局：国土交通省 政策統括官付

**2. 議事概要**

**(1) 提言を踏まえた取組みの実施状況（報告）**

**【(1) に対するご意見および質疑応答】**

- ・ 取組み状況を聞いて、随分進んでいると感じられた。防災の分野では社会展開まで進んでおらず、参考としたい部分が多かった。防災でもデュアルユースという点が大事だが、防災だけではなかなか進まない。他の分野との連携という点で自動配送ロボットは素晴らしい。個別避難計画の支援ツールとしての活用検討が最後に挙げられていたが、要配慮者の避難計画を立てることが水防法で決められており、本施策との連携と活用の検討が考えられる。要配慮者利用施設という点でバリアフリーの連携が図りやすいと思う。
  - ・ 防災という分野においても、バリアフリーとの連携ができることは非常に重要である。
- ・ 防災のための情報収集や安全確保等において、ドローンの活用が視野に入っている。いくつかの自治体で、チャレンジドによるドローン操縦の活動を自治体の防災政策に活かして欲しいという意見が出ている。最新の科学技術や ICT を活用した防災計画も検討してほしい。

- ・多様なデータを活用できるよう検討を行っていきたい。
- ・歩行空間において先進的な取組みをしていると実感した。観光分野では、公園や大規模施設の移動のサポートにおいて、施設内の自動運転等の様々なモビリティの導入が進んでいる。公的な道路ネットワークではないが、事務局からの説明にあった仕組みやデータ取得の効率性といった技術を公園等へ広げていくとシームレスな観光のアクセスに活用できると思う。
  - ・建物の中も公園も道路と繋がっている。整備したネットワークデータ等を屋内外でシームレスに繋げていけると良い。
  - ・ロボットを含めて様々な人や物が動くことで、移動した軌跡データが取得でき、データが活用できるようになるという流れになればよいと考えている。
- ・提言を受けて着実に取組みを進めていると感じた。自動配送ロボットとのデータ連携を進めていると思うが、この連携は共通の地図データを使う点や、ロボットの規格等に留意が必要だと思う。地図データが共通で使えることは、マシンの筐体（大きさ）や踏破能力等が類似していることが前提となっている。ドローンと自動配送ロボットの開発において、何かしらの点（大きさ等）で類似の規格が必要であると思う。また、道路の問題にも留意が必要である。今後の人手不足による電子商取引化に伴い、自動配送ロボットが投入されていくと考えられるが、自動配送ロボットがどこを走るかという点において、ハード面（道路自体）とソフト面（道路を使用する際の制度面）の問題がある。自動配送ロボットとドローンが共通して同じルールで走行し、連携できると良い。さらに、ドローンと自動配送ロボットは今回作成するデータを使用することになるが、操作においても、共通するシステムや共同開発等を検討していただきたい。ロボット、道路、操作システムの連携を目指して欲しい。
  - ・このプロジェクトの一番重要な部分として、最終的には人が利用するためのシステムを作成としていることである。ロボットに関する部分だけの検討では、方向性が少しずれてくると思う。
  - ・自動配送ロボットで歩道を走行するものは、時速 6km/h 以下でみなし歩行者という扱いとなり、車椅子等と同じように走行することを前提にルールが認められている。多数のロボットを監視するシステムが検討されているが、このような場面で障害者の方が参画できるのではないかと考えている。また、ロボットの規格や人においても、バリアを捉えるレベルが様々だと思うが、多様なニーズに対応できるようデータ形式へのアップグレードを検討したいと考えている。
  - ・生成系 AI の進展が進んでおり、未来のロボットはネットワークデータを必要としなくなるということを懸念している。ロボットの能力を活かし、逆に助けてもらうことになる可能性がある。

## (2) 広報活動の実施状況

### 【(2) に対するご意見および質疑応答】

- ・ アナリティクスを使ってホームページの流入者属性を分析・把握することは、ベンダー側へ情報が行くことになり、ベンダーが持っている人の情報と Web サイトの閲覧履歴を結びつけることができるようになる。そのため、ベンダーが把握している人達が国土交通省サイトのどのページを閲覧したか分かってしまうことになる。問題視されていることであり、アナリティクスを使って Web サイト閲覧者の属性を把握することは避けて欲しい。
- ・ シンポジウムの開催により、注目が集まり民間発の情報が出ると良い。また、ユニバーサル化において自治体は大事なファクターである。「人・ロボットの移動円滑化のための歩行空間 DX 研究会」に自治体関係者が 13 名ほど参加しているが、これらを点ではなくネットワーク化していく必要がある。市町村単独ではなく、圏域や都道府県単位でまとめていく必要もあると思うが、うまくモデル事業ができれば良いのではないかと。
  - ・ユニバーサルデザインの観点で、自治体毎に事業の取組みや進捗に差があることは望ましくない。地域間をどのように繋げていくかは検討に値する。
  - ・自治体の本施策に対する認知度は必ずしも高くないと考えている。シンポジウム開催の際に、様々な方法で広報・周知を行い、認知度を高めていきたい。「歩行空間ナビゲーション・データプラットフォーム」によりネットワークデータ等の整備・更新が効率的に行えるようになれば、関心のある自治体から展開していくことで成功事例をつくり、展開していくプロセスが必要だと考えている。
- ・ 自治体との連携をはじめ、各自治体が情報通信技術を使って国全体を良くする取り組みと一緒に参画できればと思う。
  - ・各委員が各分野（福祉、防災、観光、オープンデータ）に関連しており、それぞれのチャンネル等を使って連携していければ良い。

## (3) 今後の予定について

### 【(3) に対するご意見および質疑応答】

- ・ (無し。)

以上